

農林水産大臣賞受賞

～地域資源をくまなく活かした地区民総出の集落づくり～

ごうちくかつせいかいいんかい
受賞者 郷地区活性化委員会

こうちけんたかおかぐん つのちょう
所在地 高知県高岡郡津野町

おおち たかひろ
代表者 大地 隆博

■ 地域の沿革と概要

津野町は高知県の中西部に位置し、東西 28.1km、南北 15.4km、面積は 198.22 km²、東は須崎市、北は佐川町・越知町・仁淀川町・愛媛県久万高原町、西は梶原町、南は四万十町及び中土佐町に隣接している。

総面積の 90% は林野で占められており、不入山を源流点とする日本最後の清流と呼ばれる「四万十川」と、特別天然記念物のニホンカワウソが最後に目撃された「新荘川」が流れ、農用地及び宅地は、この 2 つの川沿いの緩やかな山裾を利用して点在している。

津野町の産業として特筆すべきは、「つの茶」で、かつて江戸時代には、土佐三大銘茶の一つとして知られ、標高 600 メートルに位置する茶畑は、清らかな水と澄んだ空気により品質の高い茶業が営まれてきた。しかし現在は、お茶の価格の値下がりとともに、高齢化や後継者不足が深刻化し、放棄茶園の増加などたくさんの課題を抱えている。津野町では、昔から受け継がれている「つの茶」を維持し、特産品として売りだそうと“満天の星ほうじ茶大福”に代表される加工品づくりやブランド化、企業連携によるプロモーション活動など、町を挙げて地産外商に取り組んでいる。

第 1 図 位置図



第 1 表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	市町村単位の集団(8集落)
地区の性格	機能的な集団等
農 家 率 (内訳)	48.6% 総世帯数 148戸 総農家数 72戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 12戸 1種兼業農家 1戸 2種兼業農家 13戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 2,910ha 耕地面積 29ha 田 12ha 畑 4ha 樹園地 13ha 耕地率 1.0% 農家一戸当たり耕地面積 0.4ha

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

郷地区は、津野町の北西部に位置し、仁淀川町、梶原町に隣接する町境の山間地域である。

自然豊かな地域には、日本三大カルストのひとつ「四国カルスト・天狗高原」があり、高原にある宿泊施設や森林セラピーロードは、山岳観光の拠点として、たくさんの人が訪れている。また、不入溪谷、長沢の滝、四万十川源流の裏口北川川、大引割・小引割、不動岩、弘法の岩垣な



写真 1 四国カルスト・天狗高原

どの巨石・奇岩のほか、国の重要文化的景観に指定されている口目ヶ市地区の古民家群など歴史的価値が高い地域資源も数多く点在している。

一方、地区の基幹産業である農業と林業の衰退とともに、少子高齢化、人口減少が急速に進み、集落機能の低下、コミュニティ活動の停滞、産業や伝統芸能の後継者不足が生じており、地区の人口は、8集落 158 世帯 339 人、高齢化率 48.1%（平成 30 年 4 月 1 日現在）と、平成 14 年から平成 30 年までの 16 年間で人口は約 34%減となり、65 歳以上の高齢化率も上昇している。

2. むらづくりの基本的特徴

（1）むらづくりの動機、背景

ア 小学校の閉校

郷地区に唯一あった学校、旧「郷小学校」は、郷地区民による資材の供出、分収林（学校林）の収益などにより住民の多大なる尽力によって、明治 6 年に創立され、地域児童の学びの場として、明治より長い間地元の人々に愛されてきた。しかし、児童数の減少を理由に平成 22 年 3 月に閉校となった。

イ 地域活性化に向けた取組

もともと郷地区には、8 地区を束ねる総地区長（郷会議長）を選挙で選び、住民自治を行う制度「郷会」や、高知の伝統的な皿鉢料理を組むことができる「郷地区婦人会」などを頭に結束力の強い地域で、小学校や地域のイベントでは住民が集い、行事を取り仕切ってきた。

小学校の廃校により、住民の集いや絆が薄れるのではないかと、地区の衰退に懸念を抱いた地区住民が立ち上がり、新たな拠点の新設を求めて、まずは「郷地区集会所建設委員会」を、その後、施設整備後の運営の実践的検討と地域の活性化を目的とした「郷地区活

性化検討委員会」を平成 24 年 4 月に立ち上げた。

「郷地区活性化検討委員会」は、話し合いを重ね、平成 24 年には住民主体による活性化プランを策定し、地域内外の交流と、地域外が郷地区に求めるニーズの分析を行い、特産品づくりと景観保全等を行った。

また、社会福祉協議会や高知県立大学と連携し、地域内の高齢者に対する見守り活動や来たるべき南海トラフ地震に備えた防災活動などを進めた。

話し合いは 4 年間で 200 回を優に超え、徐々に U・I ターン移住者も集落活動に関わりはじめ、四季折々のイベントを重ねながら、平成 27 年 6 月には高知県が推し進める集落活動センターを立ち上げた。

(2) むらづくりの推進体制

郷地区活性化委員会は、8 集落の住民並びに出身者、会の目的に賛同する個人や団体で構成され、339 人の住民に対し、会員数は 428 人(平成 29 年 12 月末現在:内訳 地区内 332 人、地区外 96 人)、合計 653 口と、地区のファンの多さを表す構成となっている。

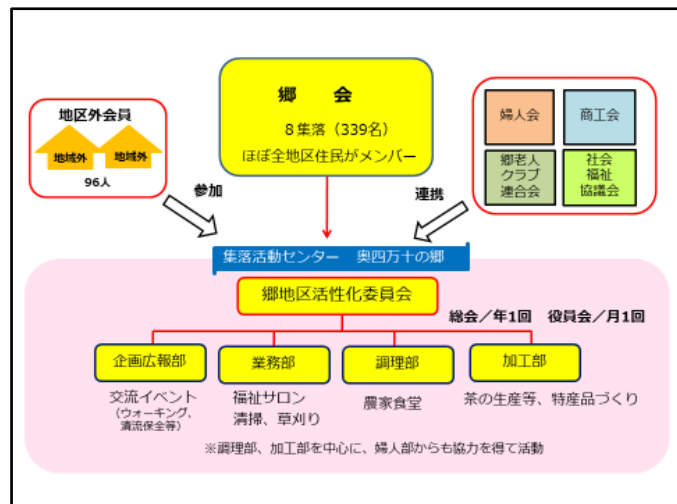
事業の推進にあたっては、地元の地域組織である

「郷会」、「婦人会」、「老人クラブ連合会」、「社会福祉協議会」、「商工会」、近隣の地域組織、行政機関との連携・協力を得ながら行っている。

郷地区活性化委員会は、年に 1 回の「総会」のほか、月に 1 回の「役員会」を開催し、取組方針や事業の進捗を確認しながら運営している。

また、「企画広報部」、「業務部」、「調理部」、「加工部」といった専門部会を組織し、農家食堂の運営や地域の清掃活動、高齢者の福祉活動などを積極的に実施している。

第 2 図 むらづくりの推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

郷地区は高齢化率 48.1%と約半数は 65 歳以上となり、「郷地区集落活動センター奥四万十の郷」の活動の中心人物も、その活動の対象者も高齢者となっている。

とはいえ、豊かな地域資源や地域ならではの食、生涯現役で地区に貢

献し続けることができる高齢者（人財）、「郷会」、「郷地区婦人会」から脈々と引き継がれた団結力などのポテンシャルを、新たな施設整備を機に、郷地区活性化委員会が中心となって有機的に機能させ、地域内外の交流拠点として関係人口の拡大に寄与し、地域の活性化に挑戦し続けている。

2. 農業生産面における特徴

（1）集落営農の取り組みと特産品の生産

郷地区は、ほぼ全集落で中山間直接支払い制度を活用して農地保全に努めている。

また、かつては郷地区でも、山あいの傾斜地を活かした茶の栽培が盛んであったが、過疎高齢化に伴い耕作放棄地が増えつつある。地区の茶畑は、重要文化的景観にも選定（平成 21 年 文化庁）され、地域の景観にとって重要な要素であるため、郷地区活性化委員会が中心となり、放棄地となった茶畑を再生し、地域の特産品として茶の栽培及び販売をはじめた。栽培面積 1,300 m²、生産量 60～70kg の「～てっぺん四万十裏源流～いらずの茶」はブランド力と煎茶本来のすっきりした味わいにより、高知市内の取り扱い店舗ではリピーターがつくほどの人気となっている。

このお茶の収益金の一部が活性化の活動に充てられ、地域経済の循環につながっている。

（2）農家食堂の運営

平成 24 年からお試しイベントを実践するなかで、地域の山菜、野菜、アユやアメゴといった川魚などの地域食材を活かした料理が地域の強みであることに自信を得て、平成 28 年 5 月、集落活動センターの



写真 2 農家食堂のおかあちゃんたち

開所を機に「農家食堂・cafe イチョウノキ」（旧郷小学校の校庭で地域を見守ってきたイチョウの木に由来）をオープンさせ、活動の中心に据えた。

営業日は土日・祝日のみで、平日は予約営業にもかかわらず、オープンから 1 年 8 ヶ月で来場者数が 1 万人に達し、常連客が押し寄せる店となった。

オープン当初は、最高齢 82 歳（平均年齢 77.4 歳）のおかあちゃん達であったが、生き生きと働いているその姿に触発された子世代（50～60 代）が活動に参加しはじめ、平均年齢を 71.5 歳と構成年齢を下げるとともに、

スタッフ数も4名から17名と大幅に増やすことができた。

看板メニューは、地元でよく採れる里芋を使った「里芋コロッケ」や市場に出荷できないナスを活かした「ナスのたたき」で、イベント時には、大皿に出すやいなや、なくなってしまう人気メニューである。

また、店内の内装にもこだわり、地元で実際に使われてきた生活用具や農機具を飾り、まるで田舎のおばあちゃんの家に戻ってきたような温かい空間づくりを心がけている。

(3) 特産品づくりと販売

平成28年12月には地区主体で県立牧野植物園と連携協定を締結し、地区の山野草調査、ウォーキングイベントやメニュー開発等に取り組んでいる。

平成29年には、同植物園とのつながりから、世界的に有名なシェフの指導を受け、メニュー開発を行った。

新メニュー「津野山はいからうどん」は、水のきれいな地元だからこそ自生しているクレソンと地元産の少量生産の野菜、高知名物「カツオ」を掛け合わせた特製ラー油が味の決め手。一般的なうどんと一線を画すその味は、特に若者に好まれる味となり、高知市内でのイベント販売でも高評価を受けている。

その他、地域の伝統食である味噌、よもぎまんじゅう、豆菓子など、次々と加工品を生み出し、常に”攻め”の姿勢で積極的にイベント出店を行い、外貨を稼ぐ活動を続けている。



写真3 県立牧野植物園との連携協定の様子

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 清流資源の保全

郷地区の周辺を流れる北川川は昔から川魚が豊富で、溪流釣りを楽しむ客が多く訪れる場所となっているが、近年は森林の間伐不足、水量の減少などから川魚が減少している。

このため、高知県と県内企業（高知食糧（株））による清流保全パートナーズ協定に基づく寄付金を活用し、夏休みの清流保全事業を平成25年から続けている。

この協定は、企業の売上げの一部を清流



写真4 清流保全イベント

保全活動を行う団体に寄付をいただき、その活動を後押しするものである。

郷地区でおこなう夏休みの清流保全事業では、川辺の草刈り、アメゴの放流と釣り体験など、水辺の環境整備に加え、日頃自然に親しむ機会の少ない子どもたちに五感で楽しむ場を提供している。

また、郷地区のこの取組が町内の他地域にも広がり、恒例事業として根付いている。

（２）地域ぐるみの清掃活動

郷地区には、恋愛成就のパワースポットとしてハートの滝口で有名な長沢の滝がある。その滝がある長沢公園（通称）の管理委託を町から受けて、4 ha の長沢公園の草刈り、間伐、山野草の植栽などを地区住民の手によって行っている。



写真５ 環境美化活動の様子

また、同様に、高知県須崎土木事務所からも委託を受け、地区が国道の草刈りや整備を行うことにより、「以前よりも道が美しくなった」と評判である。

その他、8 集落の高齢者で組織する「郷地区老人クラブ」が紅葉の植林、ゴミ拾い・草刈り、芝桜の植栽などの環境美化活動を毎年４～５回、参加者数 60 名以上で活発に行っている。住民には「草だらけは集落の恥」といった気概があり、集落内の美しさは地区民の誇りであり、訪れる者はその美しさに感嘆の声を上げている。

（３）山野草の保全活動

天狗高原の麓に位置する郷地区には、昔から、さまざまな山野草が自生し、高麗人参の一種であるチクセツニンジン、クロモジをはじめ、平成 26 年に自生が確認されたダイオウなど、学術的にも貴重な植物が数多く自生している。専門家の指導の下、絶滅に瀕している山野草の植栽を続け、地域資源を自らが守り育てる息の長い活動を郷地区活性化委員会が中心となって続けている。

近年、高知県立牧野植物園との連携が強化され、山野草の里として自然との共存に向け更に動き出している。

（４）交流人口拡大に向けた取り組み

郷地区では、季節に応じたウォーキングイベントの開催により、長

沢山や不入山など、周辺の優れた環境を知ってもらう取組を行うなかで地区のファンを獲得してきた。

また、郷地区活性化委員会が中心となり、婚活イベント「郷で合コン」を平成 24 年から 5 年間行い、平成 30 年時点で 5 組のカップルが誕生し、うち 2 組は町内に住所を置き、地区の公民館で披露宴を行うなど、新たな夫婦の誕生を地域全体でお祝いした。現在も 1 組のカップルは郷地区の消防団でも活躍する若き担い手として積極的に活動している。

そのほか、地域内には酒を飲みかわす場所がないことから農家食堂でツキイチ居酒屋を行い、地元民の交流場所として開放している。

また、途絶えていた夏祭りが平成 28 年に 3 年ぶりに復活し、それ以降、毎年の夏のイベントとして定着し、夏祭りの伝統芸能「江島踊り」も復活した。

（５）住民の見守り、福祉に向けた取り組み

郷地区活性化委員会では、平成 29 年から高齢者への配食サービス（月 1 回）をはじめた。低価格で地元食材を使ったちらし寿司とよもぎまんじゅうのセット配食は人気で、当初は 30 食程度の注文だったが今では 80 食に増え、農家食堂の稼ぎ頭になりつつある。

また、宅配時には高齢者の見守り活動を行っており、平成 30 年からは平時の備えとして、かかりつけ医や緊急連絡先などを訪問調査し、データベース化することにより、災害や緊急時に行政に頼ることなく、個々に応じた状況判断を可能としている。

加えて、ボランティアによるサロン活動、絵手紙教室、歌声喫茶、ミニコンサート、社会福祉協議会が行うあったかふれあいセンターとの連携など、来たる高齢者福祉にも大きく寄与している。

そのほか、間伐材、蔓、蔦などを使った工芸品、毛糸で作った人形、ドングリを使ったストラップなどの特産品、土産物づくりにも精を出し、農家食堂店舗内や高知市内の店舗などで販売している。



写真 6 農家食堂でサロンの体操をする
地元住民

